

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 5月8日 11:05AM 更新

[日経平均・TOPIX]

【当面の想定レンジ】(日経平均) 47,000~63,000 円
(TOPIX) 3290~3940

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】(NY ダウ) 46,000~50,500 ドル
(S&P500) 6300~7500

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】(ナスダック 100) 23,500~28,000
(ナスダック総合) 21,000~25,100

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000~160.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 95.000~102.000

エリオット波動とは

株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波(合計8つの波)で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

日経平均はプライマリー第③波の最終盤にあります。

連休明け 5 月 7 日の日経平均は前日比 3320 円(5.58%高)の大幅上昇。一時初の 6 万 3000 円台に乗せました。もっとも、寄与度上位 7 銘柄が上げ幅 3320 円の内 2427 円を占め(占有率は 73%)しており、引き続き物色は AI・半導体株などに集中しています。

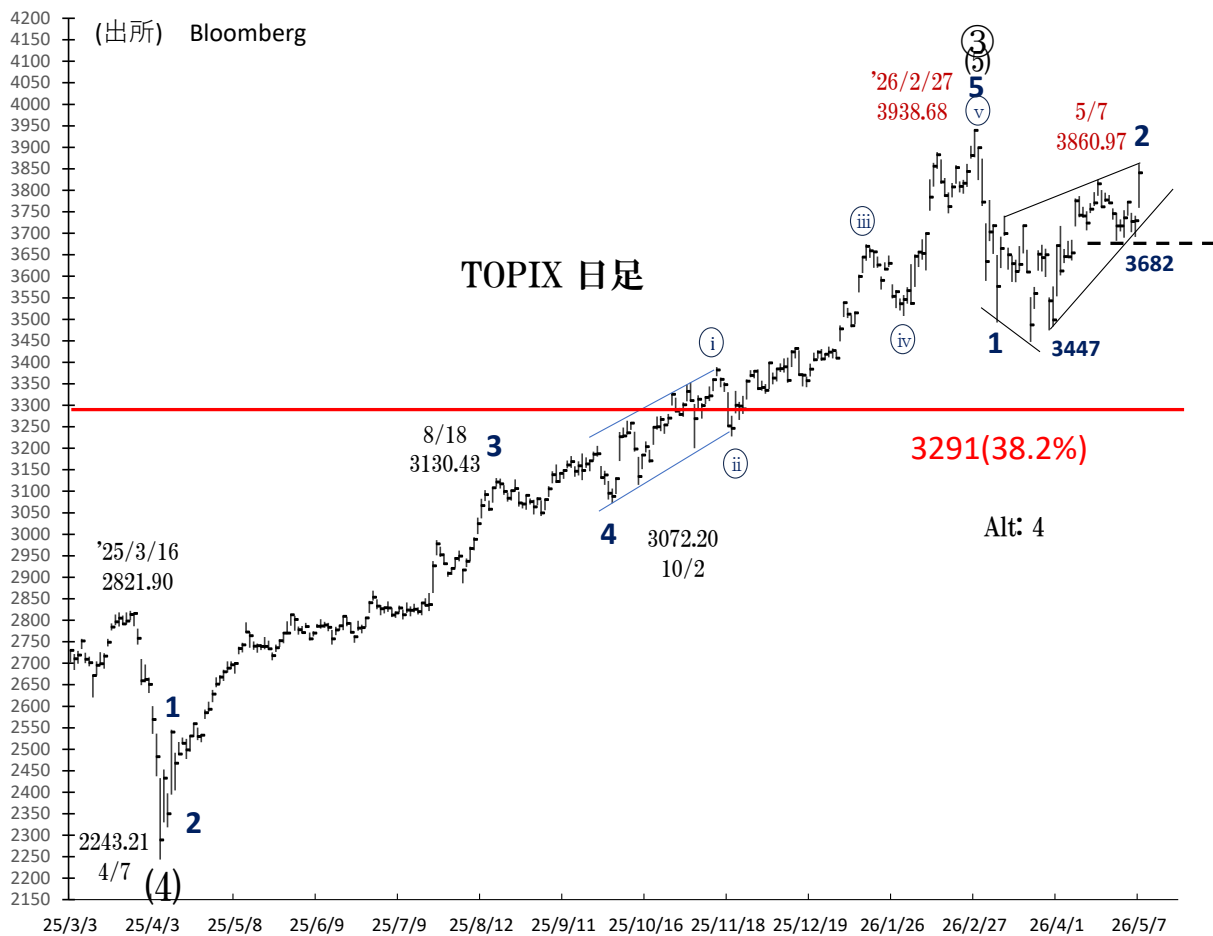
限られた銘柄が指数を引っ張る構図は、強気相場の最終局面(第 5 波)の特長のひとつです。

2020 年 3 月以来の上昇チャネル上限(来週は 58,991 円)を週末値で下回ると、最終上昇波の「スローオーバー」が確認され、上昇第③波の終了と調整第④波の開始が示唆されるでしょう。

3 月末からの週次サイクル(※)は、弱気型「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になるとみられ、サイクルの前半で天井を付けることになるでしょう。

サイクル高値の時期として 4 月～5 月が相応しいとみられ、4 月ピークアウトの可能性に注目です。高値示現後は、年末～来年 3 月のサイクル終点に向け株価は下落基調を辿るでしょう。

(※)週次サイクル期間(2020 年以降の補正後)は 45 週±8 週(37 週～53 週)。サイクルの高値から安値まで、下げ率は 10%～26%(平均 17%)。



[TOPIX]

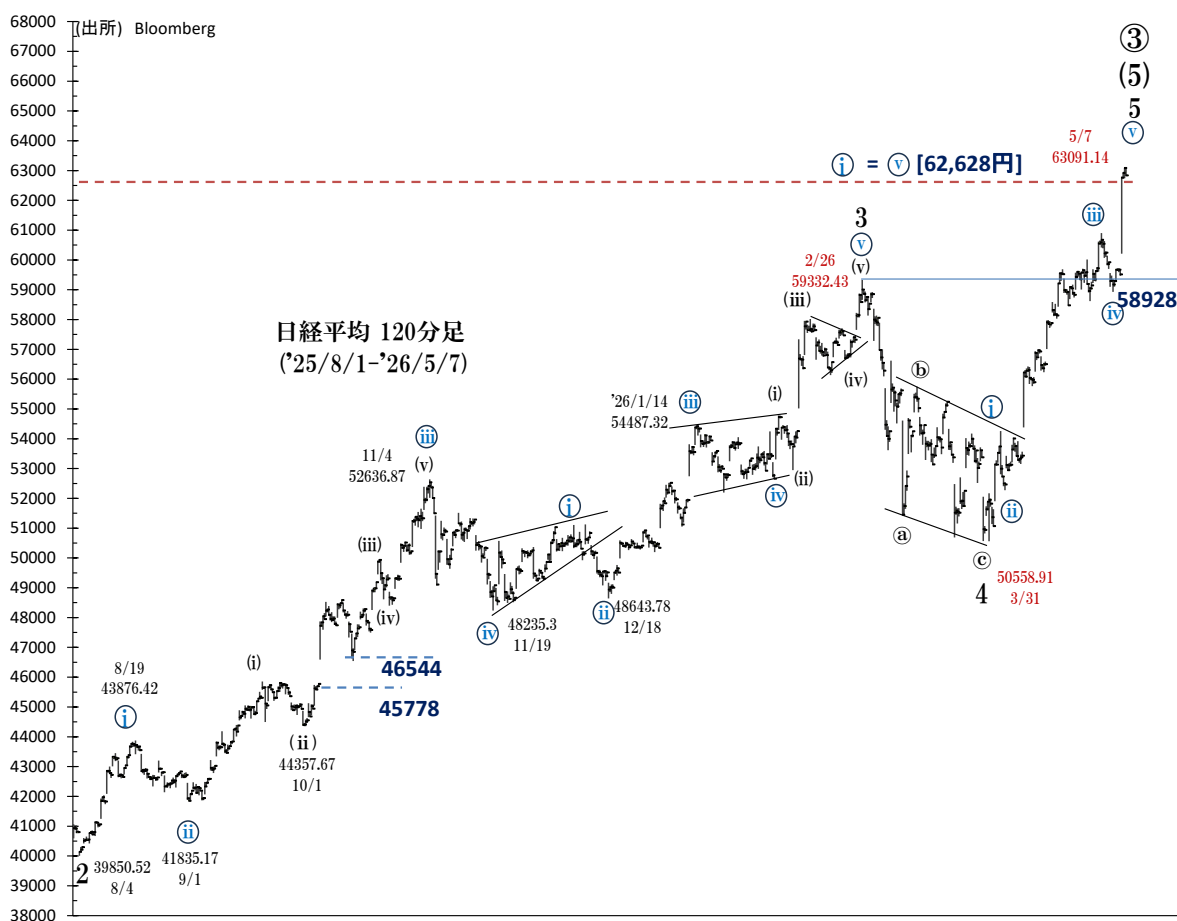
TOPIX の最高値は 2 月 27 日(イラン戦争開戦の前日)に付けた 3938(時価総額 1326 兆円)であり、日経平均に先んじています。時価総額加重型の TOPIX は景気の先行指標のひとつであり、イラン戦争からの企業業績悪化・景気後退リスクに敏感になっています。

プライマリー④波が既に始まったのなら、④波の調整規模はプライマリー①波(2018 年 1 月~20 年 3 月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになるでしょう。

3492(3/9 安値)からの第 2 波は 3860(5/7 高値)で終わったか、終わりつつあるとみています。

4 月 23 日ザラバ安値(3682)を下回ると、第 3 波による下落が始まったことの最初のトリガーが引かれます。ひとたび下降第 3 波が始まれば、それは 3447(3/23 安値)を早々に下回り、さらに黄金比サポート [3291]を試すでしょう。

ただし 3938 を上回った場合は上記の見方はキャンセルされ、3447(3/23 安値)からを第 5 波の上昇と読み換えます。



[日経平均]

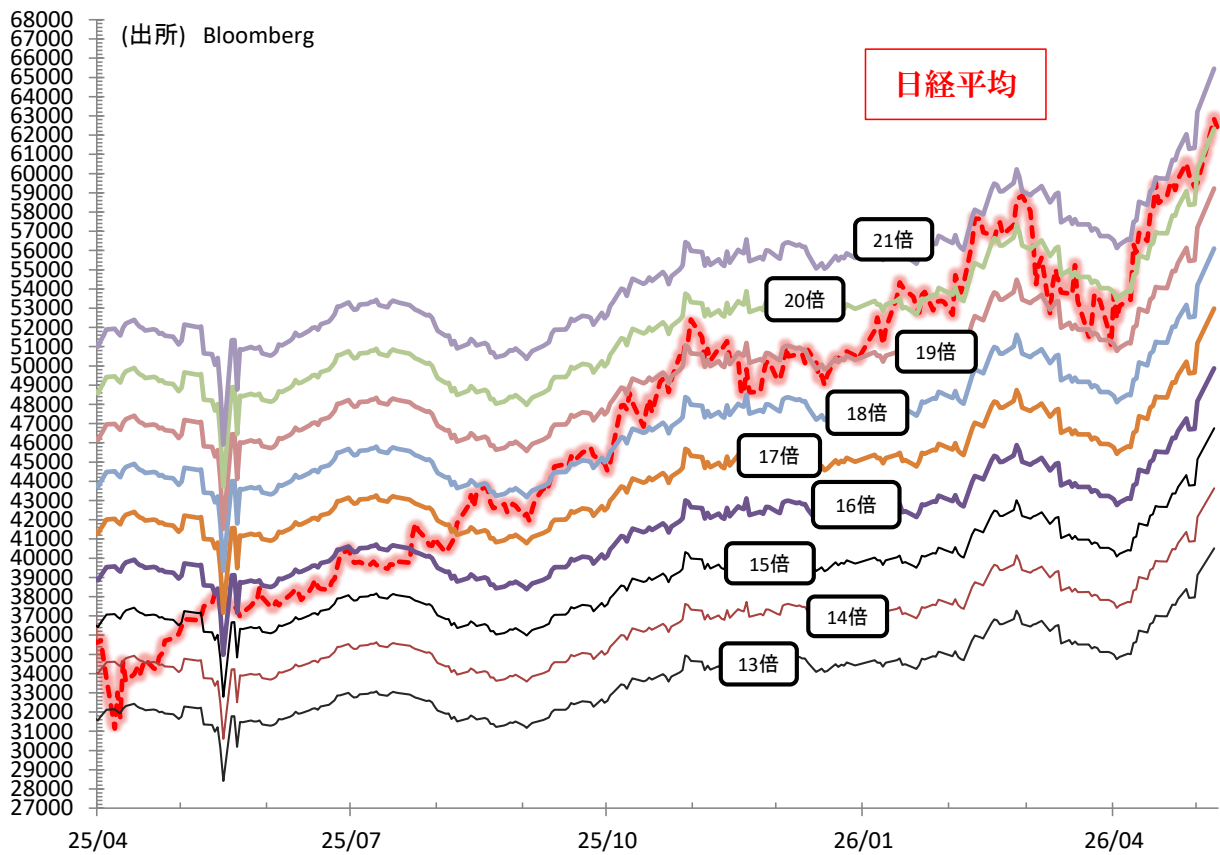
50,558 円(3/31 安値)からはマイナー級第 5 波による上昇とカウントされますが、5 月 7 日高値までには、インパルス波完了に必要な 5 つの波(マル i~マル v)がすべて揃っています。この日の高値(63,091 円)はマル i 波とマル v 波が等しくなる水準[62,628 円]、および、マル i 波起点からマル iii 波高値までとマル v 波の長さが 1:0.382 になる水準[62,880 円]、いずれも満たしています。

この日、日経平均総合かい離は 49.08%に急騰しました。これは 2025 年 11 月 4 日(50.32%)以来の過熱ぶりです(このときは 25 年 11 月 19 日までに 8.3%安となりました)。

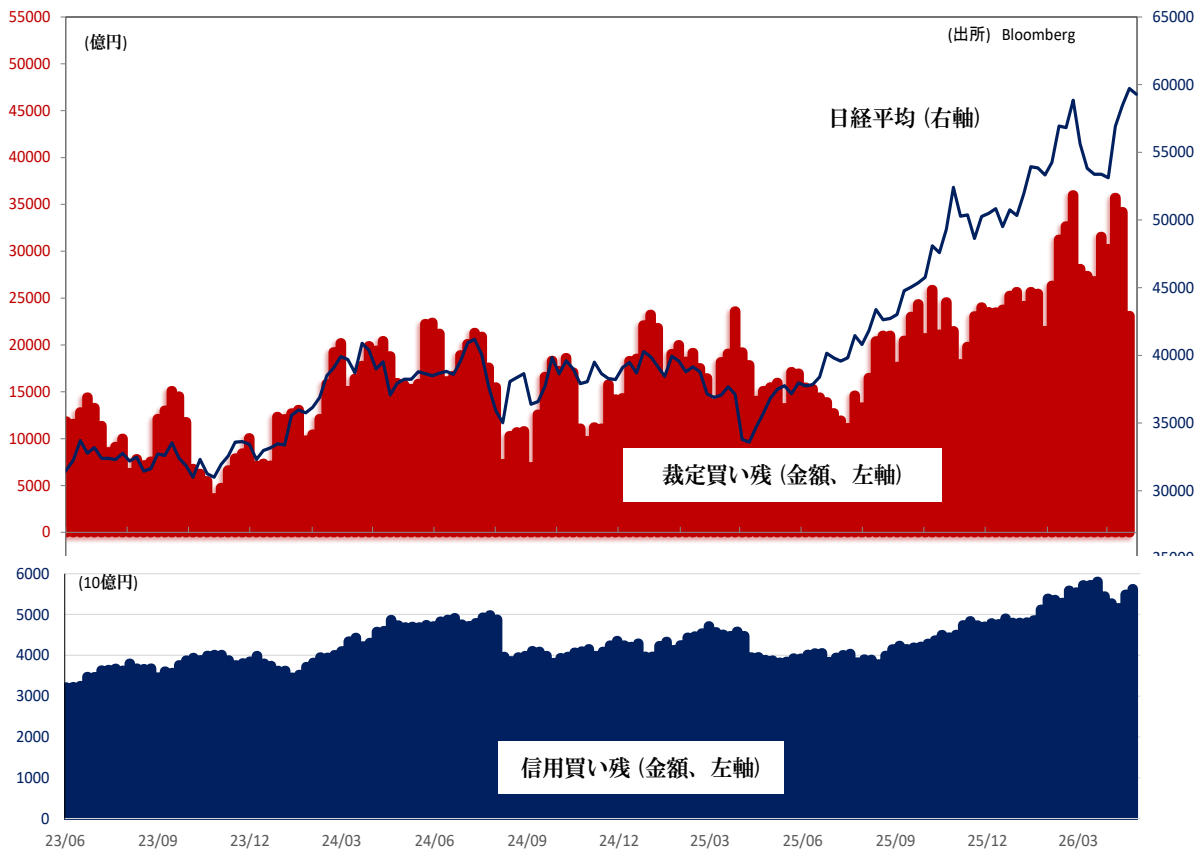
今後レッサーディグリー・マル iv 波安値(58,928 円)の去就に注目しています。終値で 58,928 円を下回ると—このとき前述したチャンネル上限も下回っていることになります—天井打ちの可能性が高いでしょう。

[予想 PER 別の日経平均水準]

5 月 7 日の日経平均予想 PER は 20.16 倍、予想 EPS は 3116 円(過去最高)です。



裁定買い残と信用買い残] (4月24日時点)





【NY ダウ 30 日足 エリオット波動分析】

45,057ドル(3/30 安値)からは第 2 波リバウンドと解釈されます。5 月 7 日には一時 50,130ドルまで上昇しましたが、2 月 10 日の高値(50512.79ドル)はいまだに抜いていません。

S&P500 とナスダック 100 が足元で最高値を更新する一方、NY ダウが 2 月高値 (50,512ドル)を更新しないなら、米株市場は 26 年前の「韻を踏む」ことになりそうです。そうなれば今年の「セル・イン・メイ」は、例年以上に重要な意味を持つでしょう。

2000 年 IT バブルからのアナロジー(類似)からは、NY ダウが最高値 50,512ドルを超えることはありません。第 2 波は目的的にも終了し、まもなく第 3 波による急落が始まるでしょう。下降第 3 波により NY ダウは、3 月安値を明確に下回ることでしょう。

一方、NY ダウが 2 月の高値を更新する場合には他のカウントが必要になりますが、後述するように輸送株の急落が米景気の悪化を示唆しているなら、NY ダウ工業株平均の上昇は長く続かないでしょう。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

6319(3/30 安値)からの上昇波は第 5 波とカウントできます。この第 5 波完了を以て、昨年 4 月以来の第(5)波も完了する見込みです。

第 5 波急騰の途中で三つのマドが空き、さらに 5 月 6 日に四番目のマドが空きました。これは最後のマド(エグゾースション・ギャップ)の可能性があります。翌 7 日はさらに最高値を更新しましたが(ザラバ高値 7385.02)反落しています。5 月 5 日終値(7259.22)を下回るとトレンド転換が確認されるでしょう。

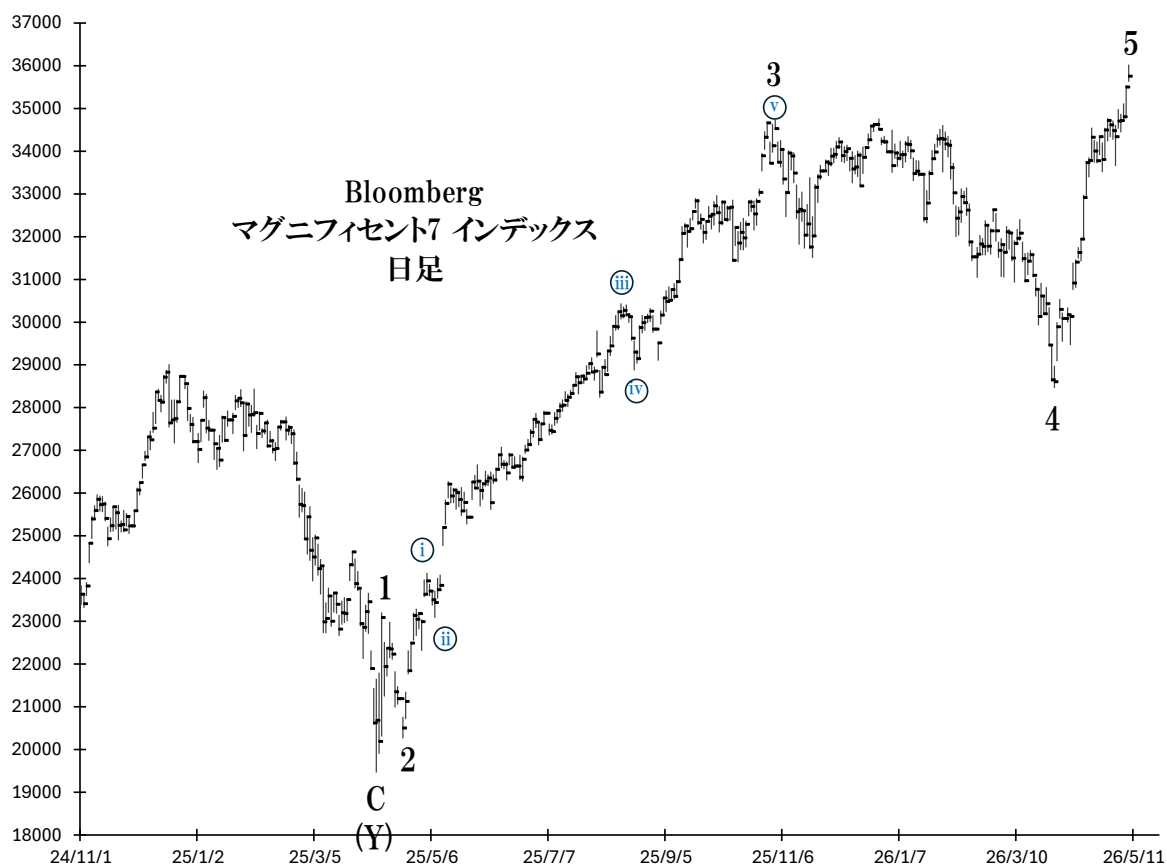
3 カ月間隔で高値を付けるリズムに照らしても、足元は第 5 波天井を付ける注目タイミングです。この辺りがピークになるか、引き続き注目してみましょう。

ダウ輸送株平均は、4 月 22 日から 5 月 4 日までの 9 営業日中 8 日間で下落し、高値からの下げ率は 21.26%に広がりました。全米平均ガソリン価格が 1 ガロン当たり 4 ドルを明確に上回り(地域によっては 5 ドルを上回る)、鉄道、航空、トラック輸送会社などに重い負担となっています。輸送株平均の「(定義上の)弱気相場」入りは、米景気の悪化を示唆しています。

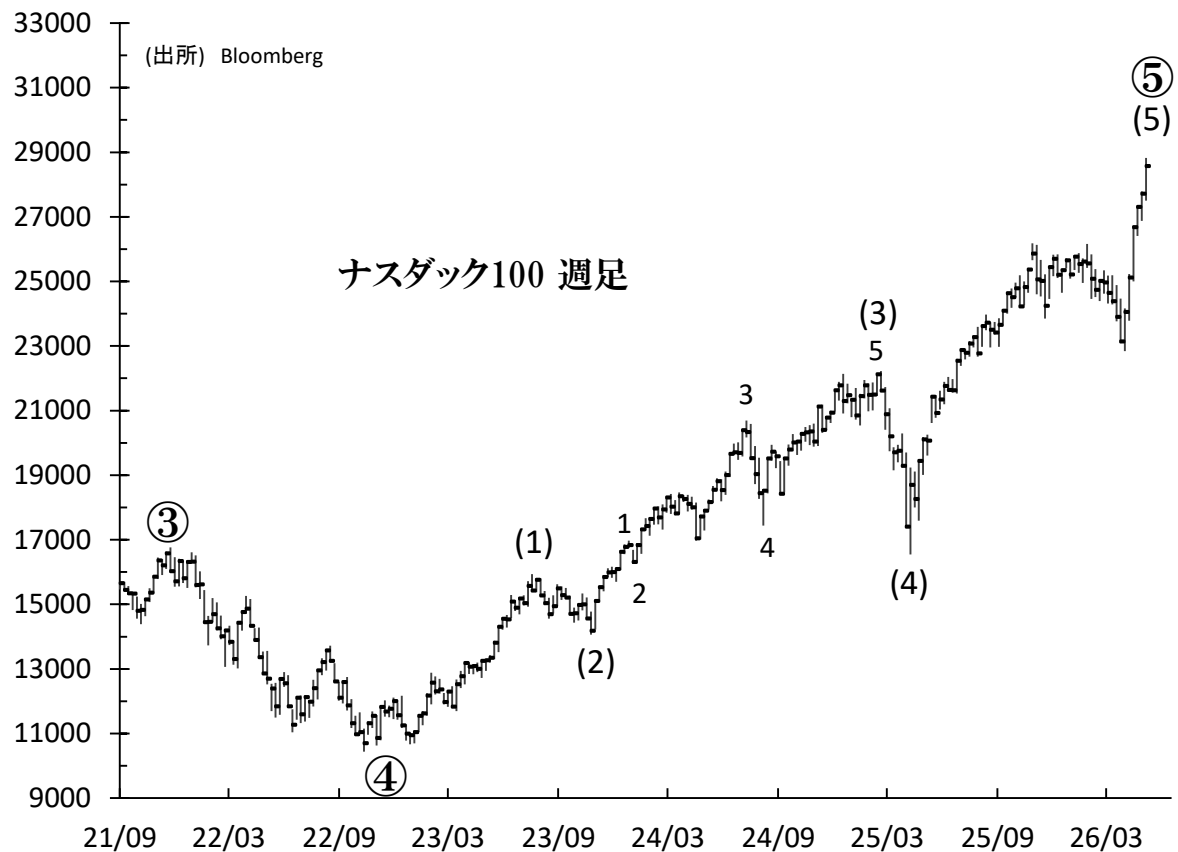
[ダウ輸送株平均] 高値から一時 21.2%安

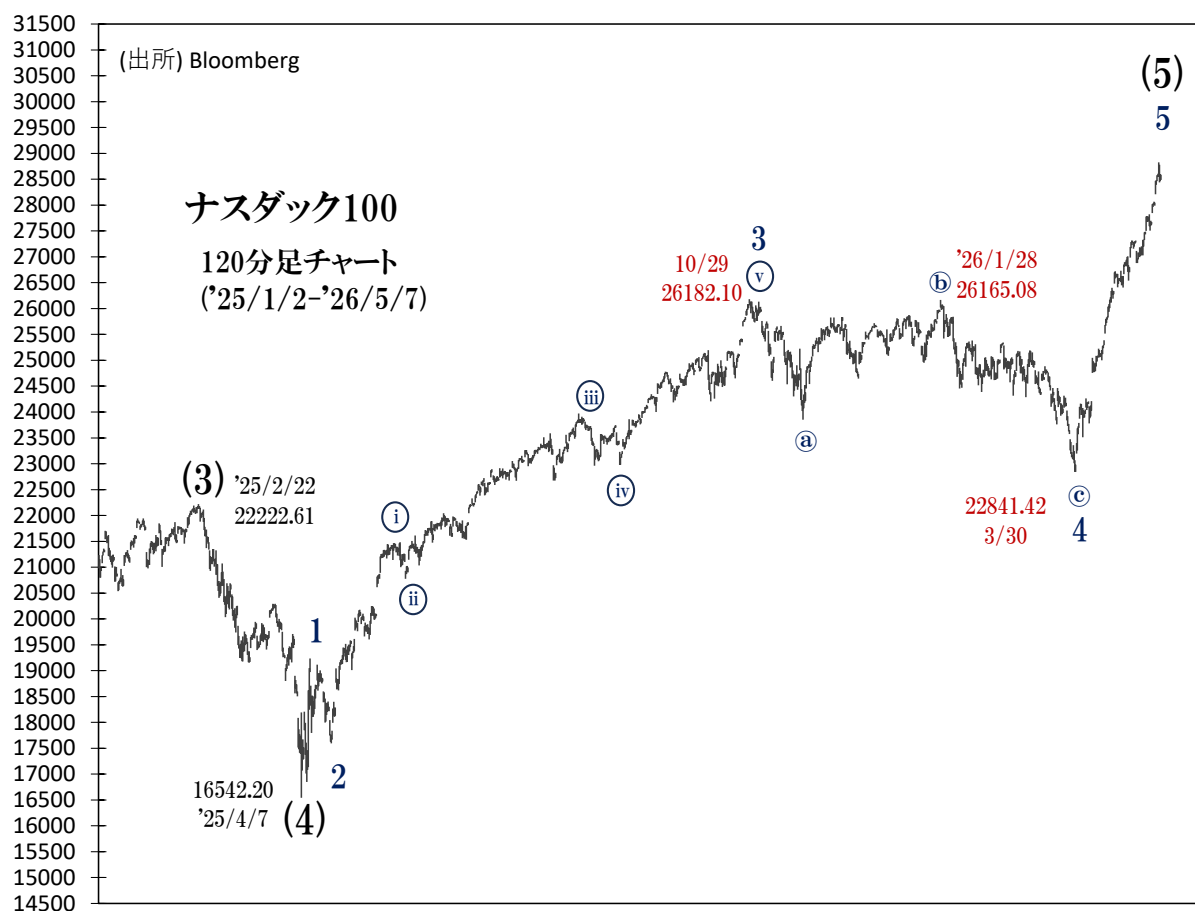


[マグニフィセント 7] 3月からの上昇第5波は完了するか



ナスダック 100





【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

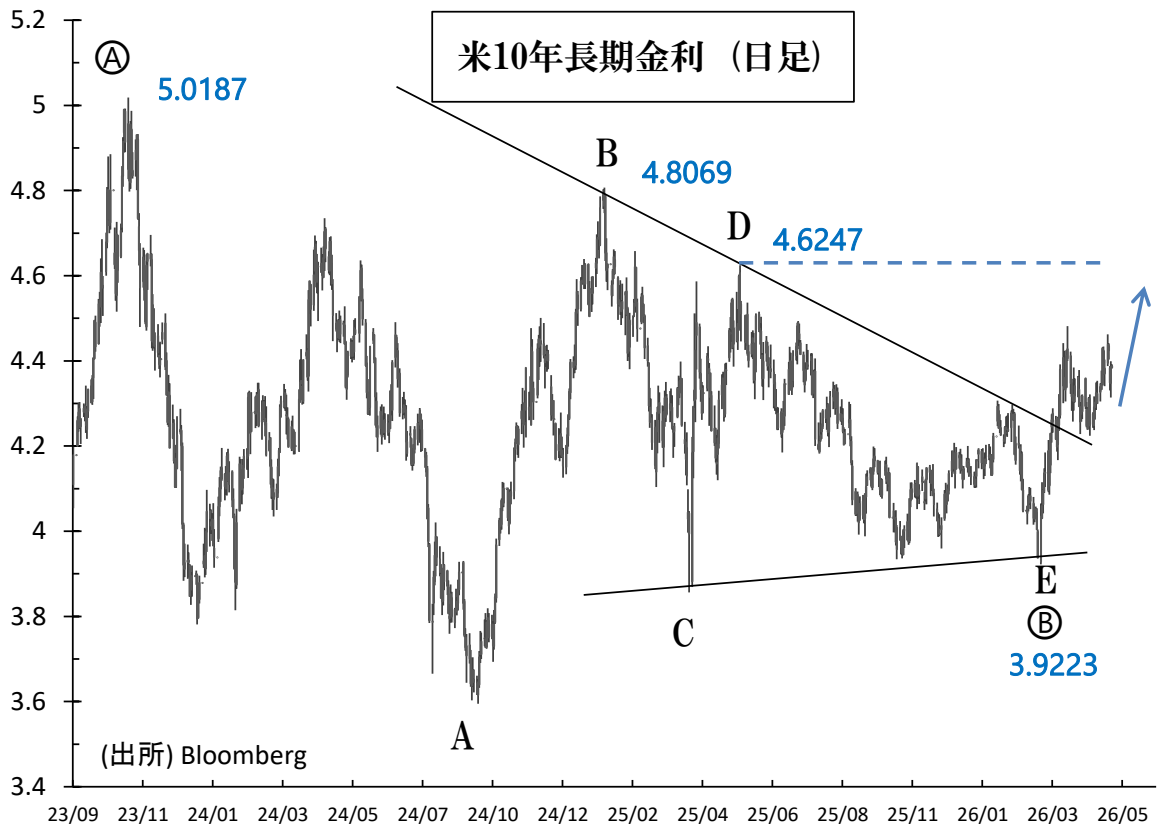
22,841(3/30 安値)からの上昇は第 5 波目に当たり、それはいつピークアウトしておかしくないでしょう。

AI・半導体株は中東リスクの影響が比較的小さい(?)とみられており、集中的に物色されています。SOX 指数を構成する 30 の半導体株の合計時価総額は、いまや米国株全体の 13%を超えています。この指数が弱気に転換すれば、米国株全体に対する影響は大きいでしょう。

ナスダック 100、SOX 指数を構成する成長株を考察する上で、今後は米長期金利に注目すべきかもしれません。米 10 年長期金利は、23 年 10 月(5.0187%)以来の大型三角保ち合いⓑ波を、今年 3 月の 3.9223%を以て完成しました。そこからはⒸ波の金利上昇とみられ、短期的には 4.6247%を試すでしょう。そして、遠からずⒸ波は 5.0187%をも大きく上回るとみられます。これは、景気悪化に関わらず物価と長期金利が上昇する「スタグフレーション」を示唆するものです。

長期金利の上昇が、ハイテク成長株にとって大きなダメージになることは言うまでもありません。

[米 10 年長期金利] 大型三角保ち合いから上放れ始めている



米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

日米実質金利差から導かれる米ドル/円(以下、ドル/円)の水準は、現在 1ドル=138 円程度です。足元の日本円は金利差からみた妥当な水準よりも極端な過小評価が続いています。

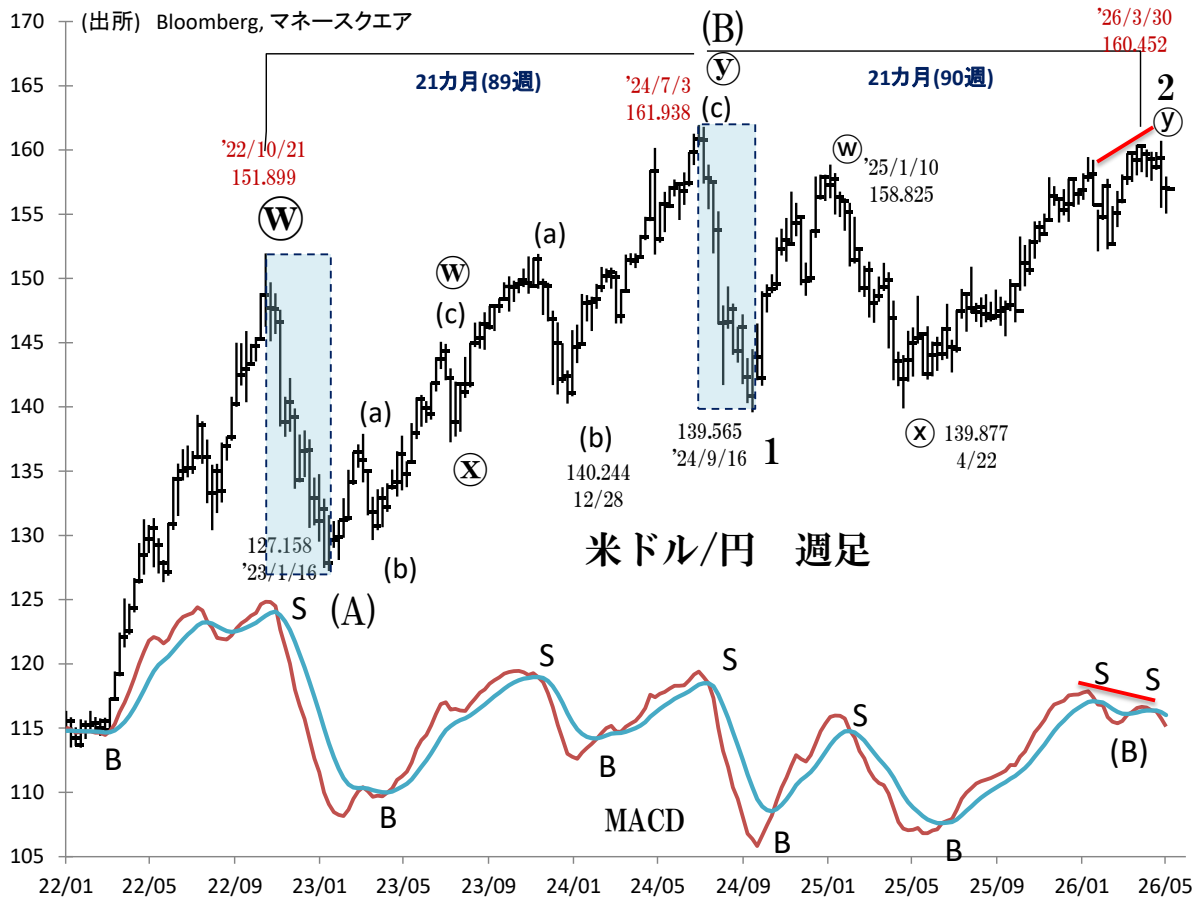
さらには、日本が「金利ある世界」に入った一方で、実質実効円レートは今なお史上最安値圏にあります。

このような「超円安」を筆者は「円安バブル」とみており、それは今後いつ弾けてもおかしくありません。

「失われた 20 年≒金利なき世界」では、円売りで調達した資金を様々なアセットに投資する円キャリー取引(※)が世界の潮流でした。しかし「金利ある世界」では、円キャリー取引の巻き戻し(円買い戻し)が進むと共に、市場ボラティリティが急上昇するリスクに留意すべきでしょう。

(※)BIS(国際決済銀行)によると世界の円キャリー取引規模は 40 兆円程度とされます。

ドル/円は 3 月から 4 月にかけて長期上昇チャネル上限を上抜きました。しかし 4 月の終値はチャネル内に引き戻されました。これにより「スローオーバー」完了が確認されました。天井パターンの確認は、ドル/円が 2024 年高値(161.938 円)と 4 月高値(160.697 円)を以てダブルトップを完成したこと、および中長期のドル安・円高トレンド入りを強く示唆しています。



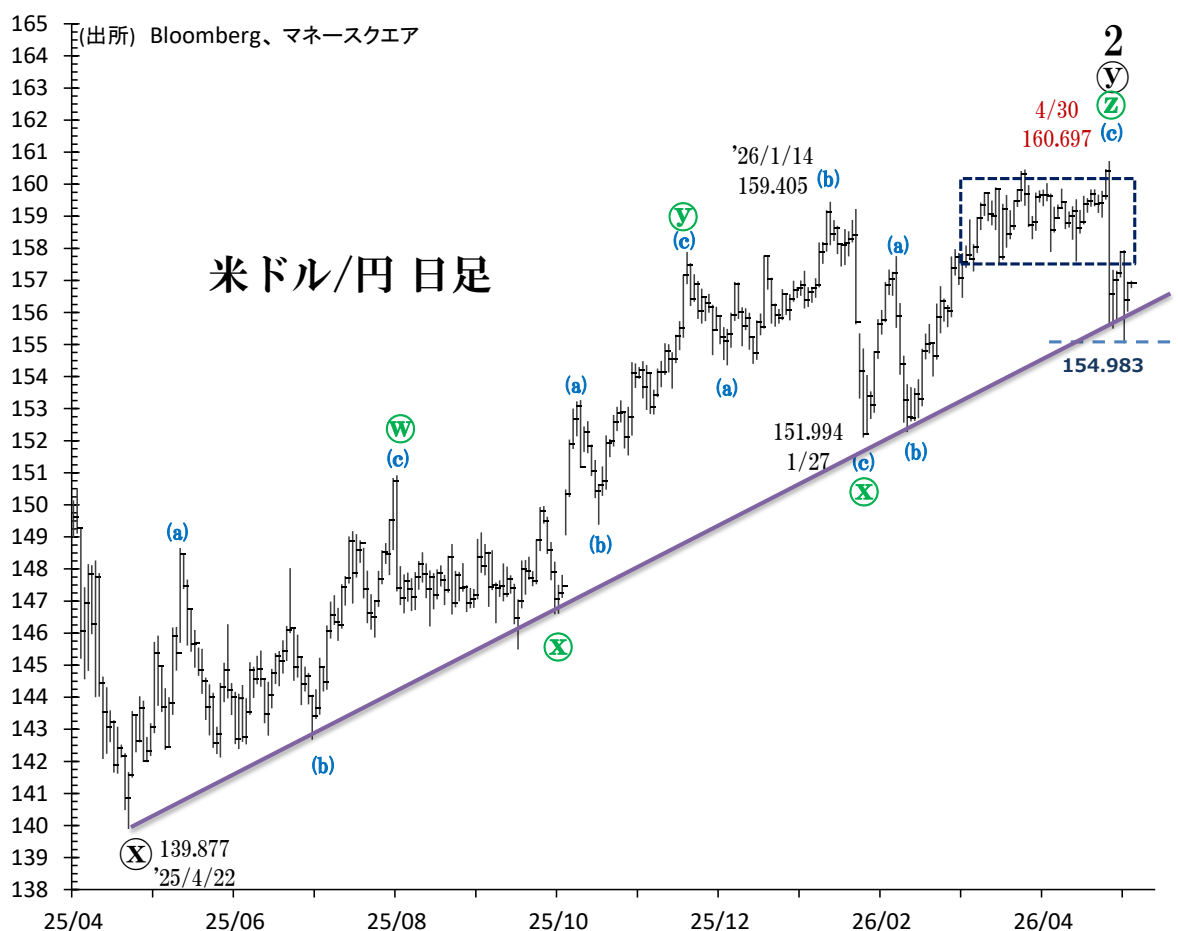
【週足 エリオット波動分析】

3月末～4月を重要なターニングポイントとして注目していましたが、4月30日の動き(この日は1年9カ月ぶり円安になり、そこからは一転、一時5円以上の円高となりました)は、まさに基調転換を印象付けるものです。

MACDは足元、1月末に続いて2度目の売りシグナルが点灯しています。これはベア・ダイヴァージェンスを伴っており、通常よりも強い(信頼度が高い)売りシグナルです。

週足チャートにシャドーで示した箇所は、円買い介入後にみられた2度の急激な円高です。最初は22年10月～23年1月の3カ月間に、24.741円幅の円高となりました。次は24年7月～9月の2カ月半で、22.373円幅も円高が進んでいます。

これらのアナロジー(類似)からは、ドル/円が今後3カ月程度で20円～25円下落する可能性がある、ということです。もしそうであれば、7月までに1ドル=140円に達するというシナリオが得られます。



【日足 エリオット波動分析】

4月30日に続き追加の円買い介入が観測されるなか、ドル/円は5月6日に一時154.983円と2カ月半ぶりドル安・円高となりました。既に3-4月のボックスレンジから明確に下放れており、このことは160.697円(4/30)を以て第2波が完了したこと、第3波による「急激かつ大幅な」下落トレンドが始まりつつあることを示唆しています。

今はまだ、終値での重要線(過去1年間のサポートライン)の下方ブレイクは確認されていませんが、154.983円をNY市場の終値で下回ると、それは第3波入りを強く促すでしょう。この場合は短期的にも152円処へのドル安・円高となるでしょう。

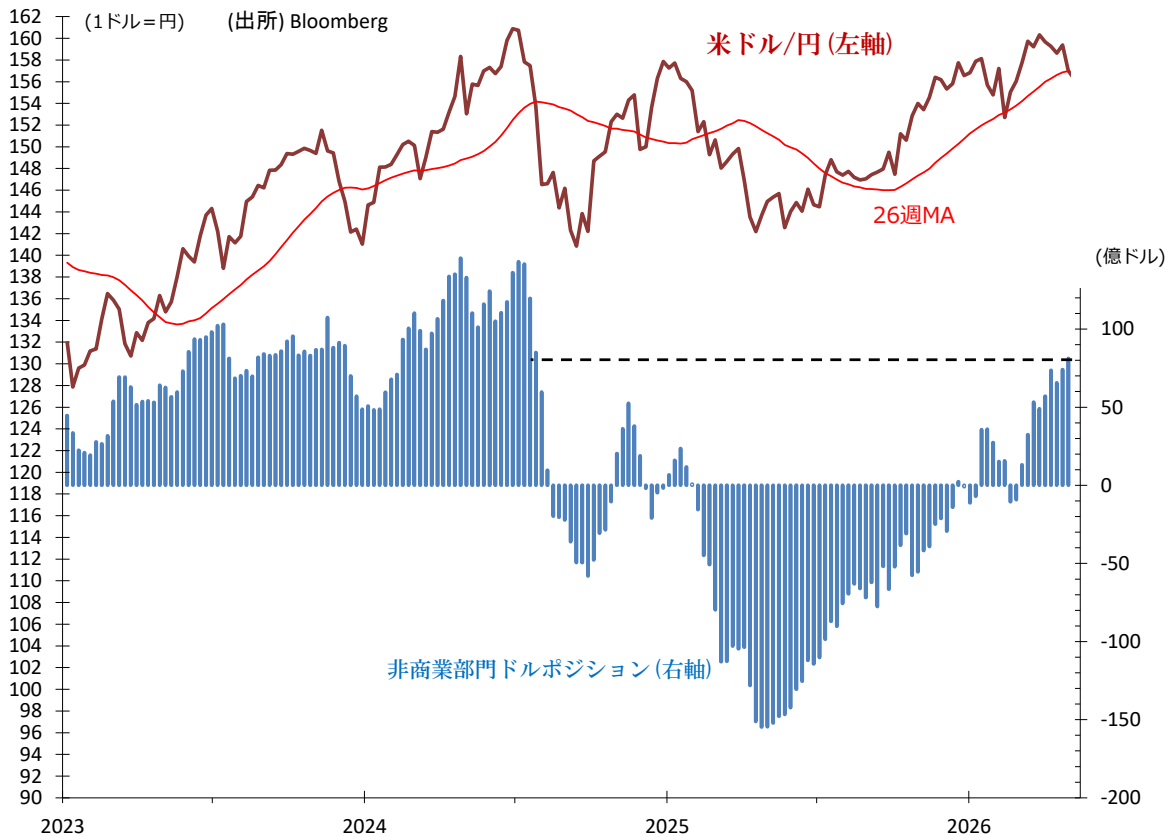
152円処への円高が示現すると、週足分析のように、1ドル=140円への円高シナリオはより現実味を帯びると思われます。

金利差からのドル/円推計値

足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[138.667円]です。

円売り持ち高が2024年7月以来の高水準に(2026年4月28日時点)

IMM通貨先物市場において、投機筋(非商業部門)の円売り持ち高が、前週の74.08億ドルから81.25億ドルへ2週続けて拡大しました。これは2024年7月以来の高水準です。



ドルインデックス (ドル指数)

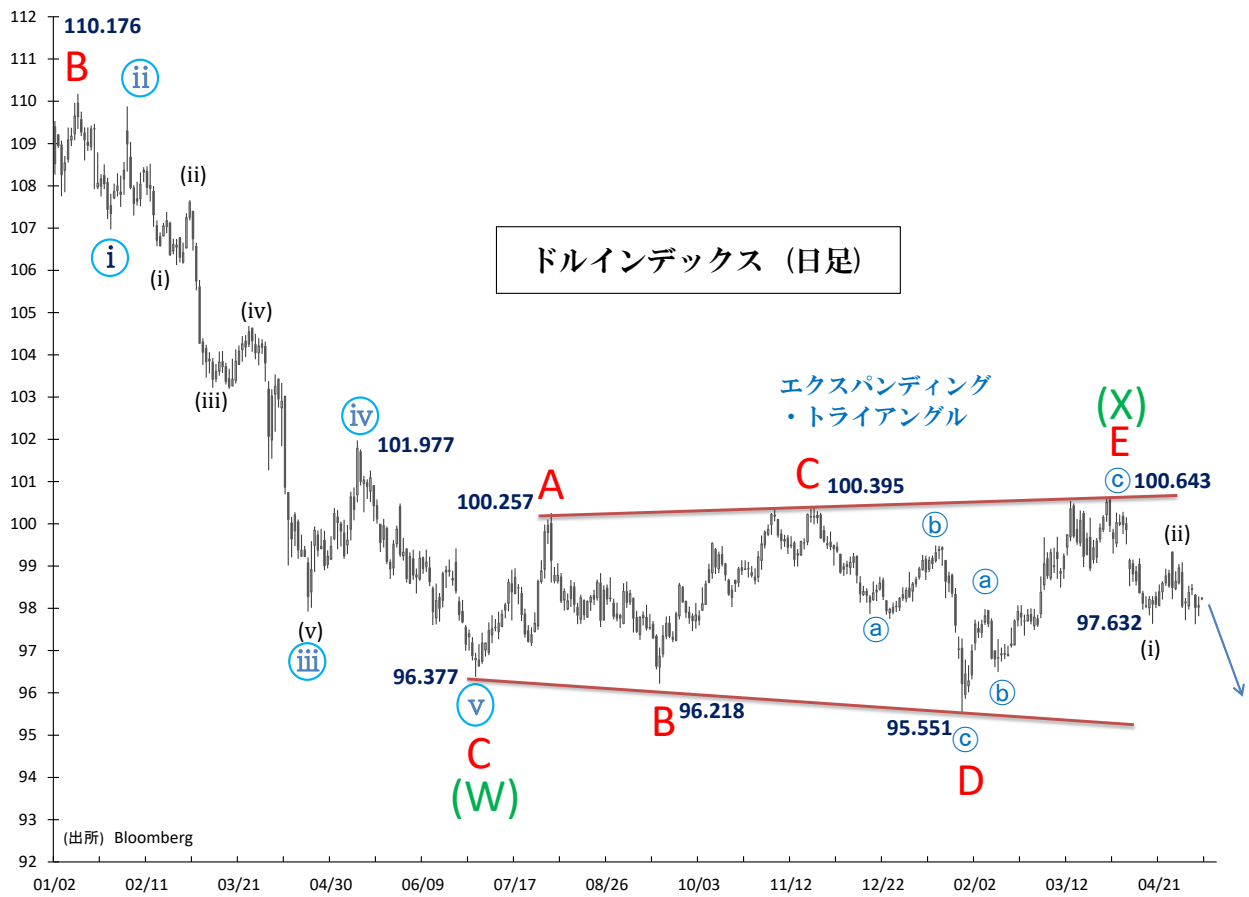


【エリオット波動分析】

25年7月(96.377)からの(X)波は、時間が経つごとに高値と安値が広がる(三角)保ち合い相場＝「エクспанディング(拡大)・トライアングル」(A-B-C-D-E)の可能性が高い、とみています。

5月6日は2カ月半ぶりドル安水準(97.625)を付けました。引き続き4月のドル高に対し61.8%押し水準[97.496]は維持されていますが、ドル安基調自体は強固なものになりつつあるようです。

97.496を終値ベースで下回れば、第(iii)波によるドル安トレンド入りの可能性が高まります。ひとたび第(iii)波のドル安入りが確認されれば、ドル指数は今年中に95.551を明確に下回るでしょう。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
